

何

時間も空を飛んでいると、窮屈な機内の座席にも体が馴染んでくる。肘と脚の置き場に困らないわけではないが、畳三分の一くらいいかなさそうなのスペースが、一時的にはあれ、自分の空間になるようだ。

今回は離陸後すぐ靴を脱ぎ、シートポケットには二冊の小説とチョコと「梅しば」を待機させ、飲み物もどんな持ってきてもらう。飛行機が太平洋の上空を突き進んで行く轟音が話し声をかき消してくれるので、周囲の会話は気にならないし、隣に座っている妻としゃべっていても誰の迷惑にもならない。さっぱりと心地がよい、完結した世界である。

そして、ここは文字通り世界から切り離されている。成田を離陸してからJFKに着陸するまでの十二時間、外は存在しないも同然であった。遙か一万メートル下に広がる海面も飛行機を包む外気もこの国にも属していない。モニターで地図を確認すると飛行機の

マークが刻々と日付変更線に近づいている。私の腕時計が示す日時は、あくまでも下界の、どこか別の場所の約束ではないことを思い出し、地球の表面を規則正しく流れる時間からも解き放たれていることを実感する。

このどこでもない機内の中の、自分の座席でしばらくぼーっとしていたら、今までの飛行機旅にまつわる、様々な記憶が蘇ってきた。高熱にも関わらず、授業に間に合うように、パリから京都へ飛んだ時、あまりの具合の悪さに混乱して、日本語とフランス語をぐちゃぐちゃに混ぜた言葉でスチュワーデスに助けを求めてしまったことがある。相手はびっくりして、即座にビジネスクラスにアップグレードしてくれた。

隣の席に座り合わせた八十二歳の日本人のお爺さんから持参のウイスキーを勧められ、これもどうぞ、と自分のチョコを出したら、あつというまにはくぱく食べ尽くされてしまったこともある。面白いお爺さんだった。

数年前、ニューヨークから東京経由

で北京に飛んだ折に、五十代前半の中国人女性と隣り合わせになった。私が日本語の本を読んでいたら向こうから話しかけられた。声で、ではなくペンとナプキンで。曲がりなりにも漢字だけの筆談を続けているうちに、朝食になり、彼女がニューヨークで買ってきた蜂蜜を開けてくれた。私たちはそれを乾いたパンに塗って食べた。中国語で蜂蜜を「蜜糖」というそうだ。

どこでもない空を飛ぶ飛行機で、初めての蜜糖。

美味、と私が書いた。很好吃、と彼女が返した。☺

どこでもない場所から

Michael Emmerich

翻訳家・日本文学研究者